絵画・コトバ・音楽
～展覧会によせて～

絵画をはじめとして、イメージというものはすべて、おのずとコトバを発生させるひとつの磁場のようなものである。それは誰もが納得しうることであろう。
しかし、おもしろいことがある。嫉妬などコトバで表現するときもちのよくないものでも、それを色と線とかたちで表現されるとなると人は美しく感じることもあるという事実である。それは音楽もおなじであろう。だからその点では絵画はコトバよりは音楽に近い。
なぜコトバがそのような性格を持つかというと、きっとコトバはロゴスであるからだ。ひらたく言えば「意見」の性質を帯びている。それに対して、絵画はもっと「うた」であり、舞踏である。「うた」と舞踏の極北が音楽であるのはいうまでもない。コトバももっとも音楽に近づいたとき詩になる。
以上が絵画・コトバ・音楽、三者のそれぞれの立ち位置である。

その三者に共通なことは、それぞれ光彩を放っているときには、決まって記憶の源郷に触れたときであるということだ。「共感覚」という語がある。感覚器は視覚・聴覚・嗅覚・触覚・味覚の五感に分化されていることになっているが、じつはおたがい滲みあっていて、領域を侵しあっているという意味だ。分化自体がどれほどの意味をもつのか、わたしも疑問である。わたしたちの内部に眠っている記憶の鉱脈にいたる道筋の違いでしかないのだから、記憶の鉱脈から逆にみれば、それらはおなじところから発してい出先機関にすぎないのではないか。
すべすべしたコトバ、甘い音、すっぱい色の組み合わせなどは、メタファーなぞではなく、確実に存在する。そうした感覚の交通が、さらに五感を耕し、鋭敏にする。絵画・コトバ・音楽の三者が相互に誘発しあっている作品例は古今にわたって、ほしいだけみつかるだろう。

さて、今回の展示に冠した主題、メガロマーヌ。巨大物好き、あるいは常規を逸した思いを語る人のことである。指揮者チェリビダッケがまだ生きている頃、フランスの雑誌か新聞かで、彼がそう冠されていたのを目にしたことがあった。「メガロマーヌ　チェリビダッケ」。多少ならぬ揶揄の毒味をふくんでいるにせよ、なんとも気宇壮大で、口にして気持ちのいいコトバではないか。実利ばかりを追い、愛を惜しむようになってしまったわれわれ現代人の卑小さを掃き清めるようなこころよい響きがこの語にはある。晩年チェリビダッケはブルックナー指揮者になっていたのだ。
朴訥にして巨大、宇宙がなだれを打ってくずれてくるような感覚のブルックナーの音楽ほど、薄い軽い短い小さいをよしとし、自我だけが肥大してしまった現代人が醸成している時代の気分に合わないものはないだろう。
わたしはとくにアダージョ楽章を愛する。音空間のなかに身も心もに包まれカラダごと上方へ、すなわちひかりの方へ持っていかれる感覚とそれによってもたらされる瞑想を愛するものである。瞑想は今日においては希有のものである。熱狂や陶酔はあっても瞑想がないのが今の時代の特徴である。
しかしヴァグナーの心酔者として登場してきたその時期をのぞいて、ブルックナーがほんとうに今日的だったときなどあったのだろうか。少なくとも時代が下るにつれ、ますますアナクロニズムになっていったのではないか。アナクロニズム。これはけっして時代遅れということばかりではない。つまり反時代的ということばかりではない。非時代的なものもアナクロニズムのひとことに括られてしまうこともある。ブルックナーはまさに非時代的なのだ。どの時代にもいつも少数だがかならずいる、瞑想を親しいものに感じ、祈りを必要とする人のための音楽がきっとブルックナーなのである。

今回は太田秀幸さんの協力を得て、タンノイのオートグラフ38口径とJBLのスピーカーでその音楽を展覧会場に鳴り響かせる。この作曲家ほど「音空間」というコトバの似合う音楽を書いた人はいない。「空間」とはまさに美術のコトバだ。この展覧会はブルックナーへのオマージュであるとともに、厚かましさを承知でいわせていただけばコラボレーションだと思っている。
この発言自体がメガロマーヌというのなら、それはまったくそのとおりである。

たきのたかき